

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## A note on the experiential basis of the space-to-time metaphor

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本多, 啓 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/637">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/637</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 時空間メタファーの 経験的基盤をめぐって

本 多 啓

## 1 はじめに

### 1.1 時空間メタファーとその分類

(1) のようにもともと空間を指示対象とする言語表現が時間を指示対象として用いられる現象が、世界のさまざまな言語に関して報告されている<sup>1)</sup><sup>2)</sup>。

(1) a. We are *approaching* the new year.

b. The new year is *approaching*.

この現象に対する認知意味論の一般的な説明は概念メタファー論によるものである (L&J (1980, 1999), Lakoff (1990, 1993) など)。この考え方では、メタファーとはある事物についての経験・理解 (target domain; 目標領域) を別の事物の経験・理解 (source domain; 起点領域) に基づいて行うことである。(1) のような時空間メタファーの場合には、空間についての経験・理解と時間についての経験・理解の間に構造的な対応関係 (写像関係) を確立・定着・慣習化させることによって人間の時間についての経験・理解の一つのあり方が成立しており、空間表現が体系性をもった形で時間表現に転用されているのは言語におけるその現れである、と考えることになる。端的に言えば、時間経過 (目標領域) が空間移動 (起点領域) に基づい

て経験・理解されている，となる。

時空間メタファーは当初は2つに分類されていた (L&J (1980), Lakoff (1990, 1993) など参照)。それは (1a) のような Moving Experiencer モデル (以下 ME と略)<sup>3)</sup> と (1b) のような Moving Time モデル (以下 MT と略) に相当するものである。ME は人間が移動すると捉えられるモデルであり，MT は時点や出来事が移動すると捉えられるモデルである。

その後の研究でこの分類は精緻化されることになった。MT と ME の関係は L&J (1980) 以来，相対性の問題と捉えられており，両者に共通する構造として “relative motion” すなわち “From our point of view time goes past us, from front to back” (L&J (1980:44)) があるとされている。この共通する構造のうち，人間と時間の相対的な関係を抽出した部分を L&J (1999:140) は “Time Orientation Metaphor” としている。これと基本的に同じものを Núñez (1999), N&S (2006) は “Basic Static Structure” と呼んでいる。

また Moore (2001, 2006, 2011) は MT と ME をまとめて “Deictic”, “Ego-centered” ないし “Ego-Perspective” の写像と呼び，これを “Sequence is Relative Position” ないし “Field-based” の写像と並立させている。この区分は “Ego-RP (=Ego-Reference Point)” と “Time-RP (=Time Reference Point)” の区分として Núñez (1999), N&S (2006) にも受け継がれている。

以上の分類をまとめると，次のようになる。

- (2) a. He has a great future in front of him.
- b. We are approaching Christmas.
- c. Christmas is approaching.
- d. Summer follows spring.

例文	L&J	Núñez	Moore
(2a)	Time Orientation	(主体参照型 基礎的静的構造)	(該当不明)
(2b)	ME	主体参照型 ME	主体参照型 ME
(2c)	MT	主体参照型 MT	主体参照型 MT
(2d)	MT	時間参照型	環境参照型

## 1.2 本稿で取り上げる問題

本稿では英語の時空間メタファーの経験的基盤を問題にする。これは具体的には、英語の時空間メタファー表現に対応する空間理解および空間表現がどのようなものかという問題である。筆者の見る限り、この問題については少なくとも次の論点がありうる。

- (3) a. 話し手はどこにいるのか。
- b. 話し手は静止しているのか、動いているのか。
- c. 空間準拠<sup>4)</sup>と時空間メタファーの関係
- d. 時空間メタファーを **primary metaphor** と考えるべきか **compound metaphor** と考えるべきか。
- e. より複合的な経験的基盤を想定する必要性の有無

本稿では主に (3b) について論じる。この問題の中核部分は「MT と ME の関係はどうなっているのか」と言い換えることができる。

本論に入る前に、(3a,c-e) について少しだけコメントしておきたい。(3a) に関して言えば、認知言語学者による時空間メタファー論は (一部の) 哲学者の展開する時間論とはかなりの隔りがある。前者は「当事者モデル」ないし「経験者モデル」と呼ぶことができるのに対して、後者は「傍観者モデル」と呼べる。これは本稿の議論の前提となるので、次節で簡略に触れる。本稿も通常の認知言語学的な研究同様、当事者・経験者モデルを想定している。

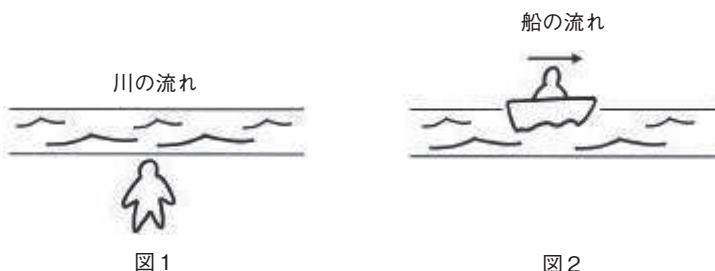
(3c) は時間表現および時間概念の研究において近年精力的に取り上げられている問題である。これについては知見の蓄積が進みつつあると同時に、ある種の「混乱」と呼ぶべき状況も生じている。その整理は興味深い問題であるが、本稿で取り上げる (3b) は、これとは独立の問題である。

(3d) については、Evans (2004) が詳細な議論を提示している。また (3e) については、時空間メタファーを複雑な認知領域のネットワークの中に位置づける研究 (Fauconnier and Turner (2008)) や、さまざまな認知的道具 (cognitive artefacts) の存在を時空間メタファーの成立基盤に想定する研究 (Sinha, Sinha, Zinken and Sampaio (2011)) などがある。しかし本稿の課題である (3b) は、この議論は、それらとも独立に展開するものである。

## 2 話し手はどこにいるのか：傍観者モデルと当事者・経験者モデル

本節では (3a) を取り上げる。伊佐敷 (2010:63) は、哲学において時間を空間的に把握するモデルを次のように図示している<sup>5)</sup>。

図1は伊佐敷自身の言葉でいえば、「未来は向こうから近づいてきて、私の目の前を通り過ぎ、過去へと流れ去っていく」という「イメージ」であり、図2は、「私自身が未来へと突き進んで行き、過去は私の背後へ消え去っていく」という「イメージ」である (伊佐敷 (2010:63))。これらはそ



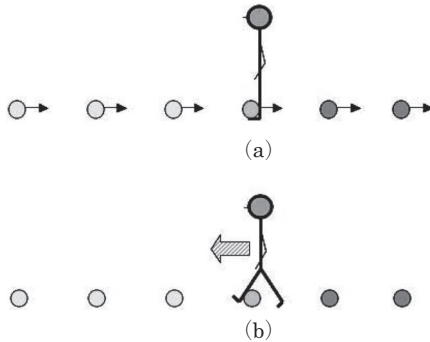


図3

れぞれ認知意味論における MT と ME に相当する。そして図1は「私が時間の流れの外に立って時間の流れを眺める」という「イメージ」であり、図2は「私も時間の流れの中にいて一緒に流されていく」という「イメージ」である（伊佐敷（2010:63））。すなわち MT に関して哲学者は、図1にあるように、人間が時間に対して「外」にある傍観者的な立ち位置をとっていると想定していることになる。これが本稿で言う「傍観者モデル」である。

これに対して認知言語学では、たとえば N&S（2006:406）が図3を提示している。これは（a）が MT を表わし、（b）が ME を表わす。

これが伊佐敷の図と異なるのは、どちらにおいても人間は時間軸上に位置していることである。

人間がつねに時間軸上にいるとする見方が認知意味論の通常の見方であることは、(4) についての L&J（1980:16）の解説(5) からもうかがえる。

- (4) Foreseeable future events are up (and ahead).
- a. All *upcoming* events are listed in the paper.
  - b. What's coming *up* this week?
  - c. I'm afraid of what's *up ahead* of us.
  - d. What's *up*?

- (5) Physical basis: Normally our eyes look in the direction in which we typically move (ahead, forward). As an object approaches a person (or the person approaches the object), the object appears larger. Since the ground is perceived as being fixed, the top of the object appears to be moving upward in the person's field of vision.<sup>6)</sup>

これが本稿で言う「当事者・経験者モデル」である。筆者自身（本多(2011)）も、MTとMEのいずれにおいても人間は基本的には時間軸上にいると想定しており、その限りにおいて当事者・経験者モデルを採用している<sup>7) 8)</sup>。

### 3 話し手は静止しているのか、動いているのか：多元論と一元論

以上を踏まえたうえで、本稿の主題である(3b)の「話し手は静止しているのか、動いているのか」の問題に移る。

通常の認知意味論では時空間メタファーにおける移動体に関して、MTについては「時間が移動し、人間は静止している」と捉え、MEについては「時間は静止しており、そこを人間が移動する」と捉えている。これはL&J(1980)以来、明示的にその妥当性が問われることがほとんどないまま当然のように受け入れられている<sup>9)</sup>。先に言及したN&S(2006)の図もこの見方を採用している。

それに対して筆者（本多(2011)）は、MTとMEのいずれにおいても「時間は静止しており、そこを人間が移動する」と捉えている。通常の見方は「MTとMEの二元論」と呼ぶことができる。これに対して筆者の見方は「ME一元論」と呼ぶことができる。

また“Time Orientation Metaphor” (L&J (1999)), “Basic Static

Structure” (Núñez (1999), N&S (2006)), さらには Moore (2001, 2006, 2011) の分類などを考慮すると、伝統的なアプローチを包括して「多元論」と呼ぶことができる。

この点に関して、最近の研究で注目に値するのは Casasanto and Jasmin (under review) である。彼らの議論は基本的に筆者の見解 (本多 (2011)) と同じであり、ME 一元論とみてよいものである。彼らは (6a) に対応する空間表現として (6b) を想定している。

- (6) a. The deadline is coming up. (時間)
- b. Elm Street is coming up. (空間)

これは (7a) に対応する空間表現として (7b) を想定する Moore (2011) とは対照的である。

- (7) a. Christmas is approaching. (時間)
- b. The bus is approaching. (空間)

また Casasanto and Jasmin (under review) は (8) に対応する空間表現を (9) としている。

- (8) a. Monday comes before Tuesday.
- b. Tuesday comes after Monday.
- (9) a. Maple Street comes before Elm Street.
- b. Elm Street comes after Maple Street.

(9) に関して彼らは話し手が移動していることを指摘し、ME と MT の違いを “perspective” の違いとしている。ただし “perspective” をどのよ



うな意味で用いているかについては説明していない。

Casasanto and Jasmin (under review) の議論は “perspective” をどのように概念規定するかの問題は残るものの、それ以外の点に関しては筆者の見解（本多（2011））と同じであり、ME 一元論とみてよいものである<sup>10</sup>。

以下、多元論と一元論の、それぞれの論理的帰結を比較検討していく。

#### 4 多元論と一元論の帰結（1）：想定される経験的基盤の違い

まず MT と ME の関係について考える。多元論を採用するか一元論を採用するかは、時空間メタファーの経験的基盤をどのように想定するかに影響する。

ME に関して言えば、どちらの立場をとっても違いはない。どちらにしても、(10a) に対応する空間表現を (10b) のようなものであると想定することに変わりはない。

- (10) a. We are approaching Christmas.  
b. We are approaching Kyoto/the traffic light.

ここにおいて、クリスマス、京都、信号機はいずれも不動と捉えられている。

違いが出るのは MT に関してである。すでに述べたように、(11a) に対応する空間表現として、多元論では (11b) のようなものを想定するのに対して、一元論では (11c) のようなものを想定することになる。

- (11) a. Christmas is approaching.  
b. The bus is approaching.  
c. Kyoto is approaching.

ここにおいては、バスはそれ自体可動なものである。京都はそれ自体は不動であるが、京都に向かって移動する話し手にとっては、(自分に)近づいてくるものとして可動であるかに捉えられる(本多(2011))。すなわち多元論においてはクリスマスがそれ自体移動可能なものであると捉えるのに対して、一元論ではクリスマスはそれ自体移動不可能と捉える。ただし一元論では、時間軸上を過去から未来に向けて移動する話し手にとっては、クリスマスが(自分に)近づいてくるように捉えられると考えるわけである。

表記の仕方を変えるならば、(12)のペアに対応する空間表現として、多元論が(13)のペアのようなものを想定するのに対して、一元論では(14)のペアのようなものを想定することになる。

- (12) a. We are approaching Christmas.  
b. Christmas is approaching.
- (13) a. We are approaching Kyoto.  
b. The bus is approaching.
- (14) a. We are approaching Kyoto.  
b. Kyoto is approaching.

(12)の二つの文はいずれも「クリスマスの接近」という同一の事態を指示対象としている。また、一元論が基盤として想定する(14)の二つの文も、「京都への接近」という同一の移動事態を指示対象とする。すなわち一元論は、同一の指示対象を共有する二つの時間表現に対して、同一の指示対象を共有する二つの空間表現を対応させているわけである。一方多元論が基盤として想定する(13)の二つの文は、二つの異なる事態を指示対象とする。すなわち多元論は、同一の指示対象を共有する二つの時間表現に対して、二つの異なる指示対象を持つ空間表現を対応させているわけである。

これと同じことは、別の言い方で述べることもできる。(12)の二つの文

は図と地の反転の関係にあると言われることがある<sup>11)</sup>。一元論が基盤として想定する(14)では図と地の反転は(12)と同様の意味で成立していると言えるが、多元論が基盤として想定する(13)においては、図と地の反転が成立すると言うには、図地反転についての定義を見直す必要があるだろうと思われる<sup>12)</sup>。

以上から、少なくとも直観的には、多元論より一元論の方が自然であると思われる。

## 5 Moore の時空間メタファー論と McTaggart の時間論

次の論点に進む前に、ここで Moore の時空間メタファー論と McTaggart の時間論の関係について簡単に触れておく。

上述のように、Moore (2001, 2006, 2011) は時空間メタファーの構造として二層構造による三元論の立場を取っている。

- (15) a. 主体参照型 (直示型)
  - ・ ego-centered MT
  - ・ Moving Ego
- b. 環境参照型 (sequence is relative position)

それぞれの例に該当するものを挙げる。

- (16) 主体参照型 : MT
  - a. Christmas is approaching.
  - b. Summer is coming.
  - c. Winter is gone.
  - d. Spring is here.

(17) 主体参照型 : ME

- a. We're coming up on Christmas.
- b. We passed the deadline.
- c. We've reached June already.
- d. We're in summer.
- e. We're headed for fall.
- f. Spring is behind us.

(18) 環境参照型 (sequence)<sup>13) 14)</sup>

- a. An explosion followed the flash.
- b. A reception followed the conference.
- c. Summer follows spring.

Moore は (15a) と (15b) を McTaggart (1993) の言う「A 系列」と「B 系列」に相当するとしている。しかしながら McTaggart の時間論を McTaggart (1993) ではなくその基になる McTaggart (1908) までさかのぼって検討すると、もう一つ別の可能性が浮かび上がってくる。すなわち、(15b) は B 系列ではなく「C 系列」に相当するのではないかということである。

ここで、McTaggart (1908) に基づいて McTaggart の時間論を簡単に紹介しておく。McTaggart は一般に時間と呼ばれるものを「A 系列」と「B 系列」からなるとする。A 系列は<過去><現在><未来>の3項からなる系列であり、B 系列は先後 (earlier/later) 関係からなる系列である。

ここまで見ただけであれば、Moore の想定する対応関係は妥当であるかのように見える。しかしながら、問題は A 系列と B 系列がどのような関係にあるかである。McTaggart は時間の根源は A 系列であるとする。それでは B 系列がどのようにして A 系列から生まれてくるのかが問題になる。そこで McTaggart (1908) が導入するのが C 系列である。

C 系列とは順序ないし配列からなるもので、それ自体は時間性を持たないとされる。すなわち A 系列、B 系列いずれとも独立に存在する。たとえば「PQR」という順序ないし配列はそれ自体時間性を持たない。これはアクセスの順序によって、「 $P \rightarrow Q \rightarrow R$ 」とも「 $R \rightarrow Q \rightarrow P$ 」ともなりうる潜在性を秘めている。ただ、「 $P \rightarrow R \rightarrow Q$ 」や「 $Q \rightarrow P \rightarrow R$ 」にはなりえないわけである。

そして B 系列は、C 系列に A 系列が重なることによって生じる、というのが McTaggart (1908) の議論である。つまり McTaggart (1908) の時間論では、B 系列は A 系列に依存し、その存在を前提として存在するわけである<sup>15)</sup>。

ところで Moore の時空間メタファー論では、環境参照型メタファーは直示型メタファーとは独立に存在するとされている。したがって直示型メタファーが A 系列に対応するという前提のもとでは、環境参照型メタファーは B 系列には対応しえなくなる。つまり環境参照型メタファーは B 系列よりはむしろ、C 系列に対応する可能性が出てくるわけである。

なお、Moore が A 系列と B 系列のみに言及して C 系列に触れていないのは、依っている論文が McTaggart (1908) ではなく McTaggart (1993) であるためである可能性がある。というのは、McTaggart 自身、C 系列に言及しているのが McTaggart (1908) のみであって、McTaggart (1993) では C 系列に触れていないのである<sup>16)</sup>。

そしてすでに述べたように、C 系列はそれ自体時間性を持たないとされるものである。あるいは別の言い方をすれば、「PQR」という順序ないし配列はそれ自体では移動を含まない。それ自体移動を含まないからこそ、「 $P \rightarrow Q \rightarrow R$ 」と「 $R \rightarrow Q \rightarrow P$ 」のいずれにもなりうるわけである。

そこで Moore の時空間メタファー論に疑問が生じる。すなわち、次の二点を明らかにできないのではないかと、ということである。

- (19) a. 環境参照型メタファーがなぜ・どのようにして移動概念と結びつ  
くのか  
b. その移動の方向性はどのようにして決まるのか

## 6 多元論と一元論の帰結 (2) : 環境参照型メタファーにおける移動の起源

Moore の議論に関して生じた (19) の疑問を検討するために、環境参照型メタファーの構造についての Moore 自身の議論を確認しておく。このメタファーの構造を、Moore (2006, 2011) は次のように示している。

(20)

SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH	
source frame ORDERED MOTION	target frame SEQUENCE
Moving entities at different points on a (one-dimensional) path	→ Times in sequence
An entity that is ahead of another entity	→ A time that is earlier than another time
An entity that is behind another entity	→ A time that is later than another time

(Moore (2006, 2011))

その基盤となる空間経験としては (21) を提示している。

- (21) *Grounding scenario for* SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH  
Two entities are going in the same direction on the same path and one is ahead of the other. Wherever they go, the one that is in front arrives first, and the one that is behind arrives later.  
(Moore (2006: 220))

Moore はこれが環境参照型時空間メタファーの経験的基盤であるという

主張に関して、積極的な根拠を提示していない。つまり、sequence が移動概念と結びつく仕組みを明らかにしていない。時間表現に *follow* などの移動動詞が現れるという事実をもとに、それに合うように後づけるに (21) を提示しているように見える。すなわち、移動の存在は前提とされており、(19a) に答えられる議論にはなっていない。

また、たとえば月曜日と火曜日の先後関係は、英語では (22a) ではなく (22b) として表現される。このことは (21) を前提として認めれば説明が可能である。しかし、(21) が環境参照型時空間メタファーの経験的基盤であるという積極的な根拠が提示されていない以上、それを前提として採用することは妥当ではない。すると、(22a) ではなく (22b) が英語における通常の捉え方となる動機づけも存在しないことになる。

- (22) a. Monday follows Tuesday.  
b. Tuesday follows Monday.

すなわち、Moore の議論は (19b) にも答えられる議論になっていない。

この問題に対する一元論の考え方は次節の末尾に譲るとして、その前に ME と MT における移動の起源の問題に移る。

## 7 多元論と一元論の帰結(3) : ME と MT における移動の起源

前節と同様の問題は、多元論を取るかぎり、ME と MT にも発生する。

- (12) a. We are approaching Christmas.  
b. Christmas is approaching.  
(13) a. We are approaching Kyoto.  
b. The bus is approaching.

多元論は (12) に対応する空間表現として (13) のようなものを想定する。(13a) と (13b) は相互に独立した事態であり、移動事態がどのように生じるかは異なる。したがって、*We are approaching Christmas* がなぜ *We are approaching Kyoto* に結びつけられるのかという動機づけの説明と、*Christmas is approaching* がなぜ *The bus is approaching* に結びつけられるのかという動機づけの説明は、相互に独立していて異なっているはずであり、個別に議論しなければならないことになる。これは具体的には、(12) における *we* と *Christmas* が移動動詞 *approach* の主語になりうるのはなぜかという問題に対して、*we* の場合と *Christmas* の場合で独立の原理に基づく説明が必要となるということである。

ME における対応に関しては問題ないと言える。*we* が指示する人間は自力移動の能力を持つものである。したがって *We are approaching Christmas* において *we* がなぜ移動動詞 *approach* の主語になりうるかは明白であり、同様の構造をもつ空間表現 *We are approaching Kyoto* のようなものと対応づけることは自然と言える。

それに対して MT に関しては問題が生じる。*Christmas is approaching* において、*Christmas* は時点である。時点をなぜ移動体と捉えることが可能なのか、これは明示的な考慮に値する問題であるが、通常の時空間メタファー論ではこれが明示的に問われることはない。言い換えれば、*Christmas is approaching* が *The bus is approaching* に結びつけられる動機づけが積極的に議論されることはない。動機づけが不明なまま、暗黙の前提として受け入れられているかのようである。

つまり多元論は、ME と MT (および *sequence is relative position*) に相互に独立に経験的基盤を想定することになり<sup>17)</sup>、実際には ME 以外のモデルに関してはどのようにして移動概念が結びついているのかについて説明できていない、ということになる。

一方 ME 一元論では次のようになる。



- (12) a. We are approaching Christmas.  
 b. Christmas is approaching.
- (14) a. We are approaching Kyoto.  
 b. Kyoto is approaching.

MEの動機づけに関しては多元論と同じ見方になる。*we*が指示する人間は自力移動の能力を持つものである。したがって *We are approaching Christmas* において *we* がなぜ移動動詞 *approach* の主語になりうるかは明白であり、同様の構造をもつ空間表現 *We are approaching Kyoto* のようなものと対応づけることは自然と言える。

(14)において移動する話し手からの状況の見えをそのまま記述すれば、*Kyoto is approaching* となる。同様に、(12)において移動する話し手からの状況の見えをそのまま記述すれば、*Christmas is approaching* となる。つまり *Christmas is approaching* には *Kyoto is approaching* が対応する。これがME一元論の見方である。この見方では、*Christmas* という時点が動くようにとらえられる仕組みは自然に説明されている。

Mooreが環境参照型と呼ぶ例についても同様である。

- (8a) Monday comes before Tuesday.  
 (9a) Maple Street comes before Elm Street.

Maple StreetとElm Streetはいずれも不動のものであるが、移動する話し手にとってはこの順に前方から移動してくるように見える。そこで *Maple Street comes before Elm Street* という表現が可能になる。同様に、時間軸上を過去から未来に向かって進む話し手にとっては、月曜と火曜はこの順に前方から移動してくるように見える。そこで *Monday comes before Tuesday* という表現が成立することになる。すなわちME一元論は、環境

参照型メタファーにおいて、どのようにして移動概念が結びつけられるかも自然に説明することができる。

次の例にもこの議論はそのまま適用できる。

(23) Tuesday follows Monday.

ちなみにこの議論は、〈月曜〉〈火曜〉という不動のものがこの順序で配列されている空間を、話し手が移動することによって、〈月曜〉と〈火曜〉の間に先後関係が認識されるということと等価である。ここで、「項目がある順序で配列された空間」「話し手」「先後関係」はそれぞれ C 系列、A 系列<sup>18)</sup>、B 系列に相当すると言える。すなわちこの議論は、C 系列に A 系列が重なることによって B 系列が成立するという McTaggart (1908) のもとの考え方を忠実に受け継いだものと位置づけることができる。

## 8 多元論と一元論の帰結(4)：分類の意義

多元論を採用するか一元論を採用するかは、時空間メタファーの分類そのものをどう位置づけるかにも関わる。

多元論においては、分類の結果得られたタイプは、それぞれ別個の空間移動と結びつけられることになり、その各々が経験的基盤を構成することになる。したがって、どのような分類をどのような根拠に基づいて提示するかが、時空間メタファーの経験的基盤、ひいては時空間メタファーの構造を明らかにするうえで、重要な課題となる。しかしながら、多元論に基づくアプローチはこの点に関して明示的な議論を提示してはいない。

一方、本稿で採用している ME 一元論においては、経験的基盤となる移動はつねに経験者の移動である。したがって時空間メタファーの分類は、その単一の移動をどのように見るか（移動の基準点として何を選択し、どのような視座からその移動を見るか）の問題となる。したがって、時空間メタ

ファーをどのように分類するかという問題は、時空間メタファーの経験的基盤を明らかにするうえで実質的な意味合いをもたないことになる。

## 9 多元論を支持するよう見える例とその検討

ME と MT の関係を明示的に取り上げた研究として、Núñez (1999), N&S (2006) と Evans (2011) がある。

Núñez (1999), N&S (2006) は次の例をもとに、ME と MT を一つにまとめることはできないと述べる。

(24) a. \* Christmas and ourselves are approaching each other.

(Núñez (1999:49))

b. \* We and Christmas are approaching each other.

(N&S (2006:411))

この例は本稿で想定している ME 一元論に対する反例とはならない。そのことは、これに対応する空間表現を検討することによって明らかになる。

(25) a. \* The traffic light and ourselves are approaching each other.

b. \* We and the traffic light are approaching each other.

c. We are approaching the traffic light.

d. The traffic light is approaching.

(24) に対応する (25a, b) は不自然であるが、このことは (25d) において信号機が不動であり、移動しているのが話し手であることを否定するものではない。時間理解がこのような空間理解からの写像によるならば、(26a, b) が不自然であることは、(26d) においてクリスマスが不動であり、移動しているのが話し手であることを否定するものではないことになる。

- (26) a. \* Christmas and ourselves are approaching each other.  
b. \* We and Christmas are approaching each other.  
c. We are approaching Christmas.  
d. Christmas is approaching.

Evans (2011) は (27) と (28) の対比をもとに、空間準拠枠と時間準拠枠に構造の違いがあるとする。これは、本稿の文脈では、一元論ではなく多元論を支持する根拠を提示したものと言える。

- (27) a. We are fast approaching Christmas.  
b. We are fast approaching London.  
(28) a. Christmas is fast approaching us.  
b. \* London is fast approaching us.

これについては理論的な観点からのコメントとデータに関するコメントを合わせることによって対応が可能になる。まず理論的な点についていえば、一元論は (28a, b) のような、空間表現と時間表現の差を許容するものである。空間には不動の基準点としての大地が存在するのに対して、時間にはそれに相当するものがない。そのため、時間表現においては空間表現よりも MT が可能になりやすい (本多 (2011))。

データに関して言えば、まず Evans 自身、次の (29a) は可能ではあるが、(29b) に較べるとやや不自然であるとしている (Evans (2010))。

- (29) a. Christmas is approaching us.  
b. Christmas is approaching.

そして筆者のコンサルタントによれば、次の (30a) は不自然であり、(30b)

は可能である。

- (30) a. \*The traffic light is approaching me.  
b. The traffic light is approaching. (= (25d))

つまり空間表現においても一人称代名詞の生起の有無が文の(不)自然さと相関しており、この点で空間表現と時間表現は並行している。

このように、時間表現において空間表現よりもMTが可能になりやすいことには動機づけがあり、また、一人称代名詞の生起の有無が(不)自然さと相関する点で時間は空間と並行している。このことから、Evans (2011)が提示する(28)はME一元論に対する決定的な反証例ではなく、一元論でも対応できるものということができる。

## 10 時空間メタファーの経験的基盤を問うことの意味合い

本稿では時空間メタファーの経験的基盤について検討してきた。最後に、メタファーの経験的基盤を問うことの意味合いを検討しておきたい。

メタファー研究において、経験的基盤を問うことは、認知意味論の基本的な目標から要請される課題である。認知意味論は言語表現の意味の基盤を、人間がその表現の指示対象をどのように理解するかに求める(捉え方の意味論)。メタファーにおいてはこの理解は、対象となる概念領域と別の領域との間に構造上の写像関係を構築することによってなされると考えるのが概念メタファー論の立場である。したがって、時空間メタファー表現に関しては、時間概念と結びつけられる空間概念がどのような構造をもつかは重要な課題となるはずである。これは言語表現のレベルでは、時間表現がどのような空間表現と対応づけられるかの問題となり、そして概念構造のレベルでは、どのような空間経験と結びつけられるかの問題となるわけである。

## 11 結 び

本稿および本多（2011）で提唱している ME 一元論は多元論よりも単純なモデルであり、それゆえ時空間メタファーの構造に関して多元論よりも幅広い範囲の現象に関して統一かつ一貫した説明を与えることができるものである。

多元論と一元論の妥当性については、最終的には心理実験などによる検証が必要であろう。筆者の知るかぎりでは、一元論の可能性を想定してその妥当性を多元論と比較した心理実験は行われていない<sup>19)</sup>。今後の研究の進展に期待したい。

### 注

- 1) 本稿は本多（2011）を前提として、その論理的帰結を論じるものである。
- 2) ただしすべての言語でこれが観察されるわけではないことが最近知られるようになった（Sinha et al. (2011)）。
- 3) これは認知意味論では通常 Moving Ego ないし Moving Observer と呼ばれているが、本稿では Moving Experiencer を採用する。その理由については第 2 節を参照されたい。
- 4) この「準拠枠」は“frame of reference”ないし“reference frame”の訳である。これは通常「参照枠」あるいは「指示枠」と訳されるが、それらよりも用語の趣旨に合致すると考えられる「準拠枠」をここでは用いている。
- 5) ただし伊佐敷（2010）自身はこの図のような「線イメージ」に基づく時間論には批判的である。
- 6) ここには生態心理学の知覚論との対応を見てとることができる。このことはそれ自体興味深いことであるが、本稿ではこの問題には立ち入らない。
- 7) 本稿が通常認知意味論で用いられる Moving Ego ないし Moving Observer という用語ではなく Moving Experiencer を採用する理由も、ここにある。
- 8) なお、伊佐敷（2010:63）の図 1 は Evans（2004）の言う“Matrix sense”の *time* 概念に関しては妥当性を持つ可能性もある。
  - (i) Time flows/runs/goes on forever.ただし伊佐敷が図 1 の適用対象として想定しているのは本文でも述べたとおり、認知意味論で MT と呼ぶものに相当するものである。
- 9) これを明示的に取り上げた数少ない例外が Núñez（1999）、N&S（2006）、Evans

(2011) である。これについては第9節で検討する。

- 10) Casasanto and Jasmin (under review) が “perspective” の問題としているものが筆者の枠組みではどのように捉えられるかについては、本多 (2011) を参照されたい。
- 11) ただしこの場合の図と地は Talmy (1978, 2000) 的な解釈に基づく用語であり、Langacker (1987) 的な解釈に基づくものではない。両者の相違については本多 (2003) を参照のこと。
- 12) 本稿とは異なる観点からこの問題を指摘した論考として篠原 (2007) がある。
- 13) この枠組みでは直示性と先後関係の双方をもつ (8) がどう位置づけられるのかが不明である。本稿ではそれについてはこれ以上は問題にせず、とりあえず環境参照型に属すると考えておく。
- 14) 前の注の問題のほかにも疑問となる点はある。たとえば (ii) については、直示動詞を含む (ii)a. は主体参照型、非直示動詞を含む (ii)b. は環境参照型とされるが、これと並行するペアである (iii) に関しては、直示動詞を含む (iii)a. と非直示動詞を含む (iii)b. が同じように主体参照型に分類されている。
  - (ii) a. the coming weeks
  - b. the following weeks
  - (iii) a. Summer is coming.
  - b. Summer is approaching.
- 15) なお、McTaggart 時間論の本旨は「A 系列は矛盾ないし無限後退を含むので実在することが不可能である。A 系列が実在不可能であれば、それに依存して存在する B 系列も実在不可能である。したがって、「時間」なるものは実在しない」というものである。本稿ではこの議論の妥当性は検討しない。
- 16) ただし McTaggart (1993) においても「時間の根源が A 系列であり、B 系列は A 系列に依存して成立する」という論点に関しては McTaggart (1908) から変更されていない (McTaggart 1993:27)。
- 17) 実際 Moore (2006) は三種類のメタファーに別個の “frames” ないし “experience types” を割り当てるべきであると述べている。
- 18) 話し手は〈現在〉と結びつけられるものであるため、McTaggart の枠組みでは A 系列を構成することになる。
- 19) Casasanto (2005, 2010) は次の二つの文に言及しているが、両者の対応を前提としており、対応が成立するかどうかをあらためて問題にした実験は行っていない。
  - (iv) a. Maple Street comes before Elm Street.
  - b. Christmas comes before New Year’s.

## 参考文献

Casasanto, D. J. (2005). “Perceptual Foundations of Abstract Thought,” Ph.D.

Dissertation, MIT.

- Casasanto, D. J. (2010). "Space for Thinking," In V. Evans and P. Chilton, *Language, Cognition and Space*, 453-478. Equinox.
- Casasanto, D. J. and Jasmin, K. (under review). "The Hands of Time: Temporal Gestures in English Speakers," .
- Evans, V. (2004). *The Structure of Time*. John Benjamins.
- Evans, V. (2010 / 2011). "Temporal Frames of Reference," Draft September 2010 / Draft August 2011. <http://www.vyvevans.net/TFoRs.pdf>.
- Fauconnier, G. and Turner, M. (2008). "Rethinking Metaphor," In R. Gibbs, *Cambridge Handbook of Metaphor and Thought*, 53-66. CUP.
- Lakoff, G. (1990). "The Invariance Hypothesis: Is Abstract Reason Based on Image-Schemas?," *Cognitive Linguistics* 1 (1), 39-74.
- Lakoff, G. (1993). "The Contemporary Theory of Metaphor," *Metaphor and Thought, Second Edition*, 202-251. CUP.
- Lakoff, G. and Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and Johnson, M. (1999). *Philosophy in the Flesh*. Basic Books.
- Langacker, R. W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar* I. Stanford UP.
- McTaggart, J. M. E. M. (1908). "The Unreality of Time," *Mind* 17, 457-474.
- McTaggart, J. M. E. M. (1993). "The Unreality of Time," In R. L. Poidevin and M. MacBeath, *The Philosophy of Time*, 23-34. OUP. (Originally published in 1927 under the title "Time", as Chapter 33 of *The Nature of Existence*).
- Moore, K. E. (2001). "Deixis and the FRONT/BACK Opposition in Temporal Metaphors," In A. Cienki, B. Luka, and M. Smith, *Conceptual and Discourse Factors in Linguistic Structure*, 153-167. CSLI Publications.
- Moore, K. E. (2006). "Space-to-Time Mappings and Temporal Concepts," *Cognitive Linguistics* 17(2), 199-244.
- Moore, K. E. (2011). "Ego-perspective and Field-based Frames of Reference: Temporal Meanings of FRONT in Japanese, Wolof, and Aymara," *Journal of Pragmatics* 43(3), 759-776.
- Núñez, R. E. (1999). "Could the Future Taste Purple?: Reclaiming Mind, Body and Cognition," In R. E. Núñez and W. J. Freeman, *Reclaiming Cognition: The Primacy of Action, Intention and Emotion*, 41-60. Imprint Academic. (*Journal of Consciousness Studies*, 6, no.11-12).
- Núñez, R. E. and Sweetser, E. E. (2006). "With the Future Behind Them," *Cognitive Science* 30, 401-450.



- Sinha, C., Sinha, V. d. S., Zinken, J., and Sampaio, W. (2011). "When Time is not Space" *Language and Cognition* 3(1), 137-169.
- Talmy, L. (1978). "Figure and Ground in Complex Sentences," In J. H. Greenberg, *Universals of Human Language IV Syntax*, 625-649. Stanford UP.
- Talmy, L. (2000). *Toward a Cognitive Semantics I*. The MIT Press.
- 伊佐敷隆弘 (2010). 「時間」. 松永澄夫・伊佐敷隆弘 (編), 『世界経験の粹組み』, 60-95. 東信堂. 『哲学への誘い—新しい形を求めて IV』
- 篠原和子 (2007). 「時間のメタファーにおける図と地の問題」. 楠見孝 (編), 『メタファー研究の最前線』, 201-216. ひつじ書房.
- 本多啓 (2003). 「認知言語学の基本的な考え方」. 辻幸夫 (編), 『認知言語学への招待』, 63-125. 大修館書店. (シリーズ認知言語学入門第1巻).
- 本多啓 (2011). 「時空間メタファーと視点—生態心理学の自己知覚論をふまえて—」. 『人工知能学会第2種研究会ことば工学研究会資料 SIG-LSE-B003: ことば工学研究会 (第37回)』 pp.77-86.  
<http://homepage2.nifty.com/honda-akira/honda-final-2011-03.pdf>.